

平成25年度

# 実践集録



島根大学教育学部附属幼稚園

## はじめに

島根大学教育学部附属学校園は、平成20年度から一貫教育を本格実施し、「豊かな『社会生活』を創造する幼小中一貫教育の追究」をテーマに掲げ、「豊かな『学び』をつくる子どもの育成」をめざしてきました。その取組は、本年度で6年が経過し、一つの節目として著書『幼小中一貫教育で育つ子ども 未来の暮らしをともにつくる』を刊行します。

そして、附属幼稚園は、本年度、記念すべき大輪町移転50周年を迎えました。平成25年は、出雲大社で60年に一度の「平成の大遷宮」が執り行われ、島根の地の大きな節目に当たる同年度に著書が刊行でき、加えて本園の移転50周年と、幾つかの節目の重なり不思議な「縁」・「結びつき」をみる思いがします。

50年前、本園の大輪町移転に当たっては、園舎の施設・設備が「近代的に衛生的に文化的に整備」されていましたが、園舎外は移転後の整備でした。しかし、今では、驚くほど種々の木々が植えられています。とりわけ、園庭中央付近にあるスズカケの木は、大人が両手で抱えきれない幹の太さで、本園の象徴的存在になっています。移転後50年という節目の年に、園内に育つ木々の成長から改めて本園の歩みの重み・確かさを感じます。

また、この機に本園の研究のあゆみを繙いてみると、昭和31年度に「保育の今日課題とその対策」を主題にした『研究紀要』（第1号）の発刊をみることができます。ちなみに、それ以前にも貴重な研究がなされたようですが、十分な資料等が保管されておらず、研究内容等については明らかではありません。

昭和45年には、それまでの理念や保育研究等を集大成し、著書『幼児教育の革新』（近藤正樹監修）が刊行されます。その後、長年にわたって「ひとりひとりを生かす保育」（昭和47年度～平成3年度）を研究主題に掲げ、「子どもと共に創る生活」（平成4年度～平成12年度）、「期にふさわしい生活」（平成13年度～平成17年度）へと展開してきます。そして、平成18年度からは「幼小中一貫教育に向けて」と題した取組が始まり、今日に至ります。

このように本園の保育研究のあゆみを振り返ると、まずは、昭和47年度が大きな転換点になっています。それまでの保育の動向と課題等の園外の大人の視点から、本園で生活する子どもの視点に立つ研究主題への転回を感じるからです。そして、それは幼小中一貫教育へと続き、隣接する幼小中が連携・交流しながら「豊かな『学び』をつくる子ども」の姿をめざし現在に至ります。

本園の保育研究は、『研究紀要』（第1号）の発刊から57年のあゆみを重ねてきました。そして、今日、本園は、「自分がみつけ、なかよく、こころゆくまで遊びきる」子ども像を思い描いて保育実践をすすめています。いつの時代でも、本園保育の中心には、子ども自らが求める「遊び」や「学び」の姿が存在していました。本実践集録は、本年度一年間のかけがえのない保育実践であり、そうした子どもたちの姿の事実と考察です。これからも、私たち教職員は、真摯な保育研究をとおして、子どもたち自らが求めていく「遊び」や「学び」のよりよい姿を追い続けたいと考えます。

どうか皆様方の忌憚のないご批正と温かいご指導をよろしくお願いいたします。

平成26年 3月

園長 佐々有生

## 目 次

---

はじめに	佐々有生	
幼小中一貫教育研究主題にかかわる実践		
I 基本的な考え		1
II 実践事例		
事例1 友だちとの関わりを通して、自分の遊びや遊び方を広げていく子ども 「〇〇っておもしろいよ」 < 4歳児 さくら組 >	福井智子	3
事例2 友だちのイメージを受け入れ、一緒に遊びを広げていく子どもたち < 4歳児 たんぽぽ組 >	井上結美子	9
事例3 めあてを実現するために、考え、友だちと伝え合う子ども 「こうするともっとおもしろいよ」 < 5歳児 ほし組 >	内田祐	15
事例4 「自分でみつけた遊び」の経験がいかされた行事にしていくために 一年長5歳児「こどもまつり」の活動より— < 5歳児 つき組 >	南海睦	21
その他の実践		
幼稚園における道徳性の芽生えを培うための取組について	加納美紀	27
生徒支援や特別支援から見てきたこと	福島由美子	33
附属幼稚園の歴史をたどって	赤木寛子	37
寄稿		
子どもの学びの育ちとそれを支える保育者の資質と能力 —平成25年度の附属幼稚園での実践を手がかりにして—	西田忠男	49
おわりに	赤木寛子	

# 幼小中一貫教育研究主題に かかわる実践



# その他の実践



# 寄稿



## お わ り に

本附属学校園が、一貫教育に向けた取組を始めてから今年度で8年になります。暗中模索の状態から、とにかくできることからと、目に見える活動から始めたものの、各教科、各分掌からの提案で一時は多忙を極め、「一貫」という言葉にふりまわされた時期もありました。幼稚園の保育研究を振り返っても、特定の教科や領域の中に含まれるなど、めざす保育の姿が大きく揺れ動いた8年でもありました。その中で、成果の見える取組、無理のない取組、子どもの育ちに本当に必要な取組が精選されてきたことは、その時時の教職員の努力の賜だといえるでしょう。

今年度は、幼小連携について取り組んできたことを地域に発信する場が、教員免許更新講習と雲南市幼稚園教育研究会研究部全体研修会の2回ありました。形から始まったにせよ、子どもの成長を第一に進められてきた本附属学校園の取組は、地域の学校園にも参考にしていただけることが多々あると感じています。

また、今年度は幼稚園・小学校が大輪町移転50周年を迎えました。改めて百年を超える幼稚園の長い歴史を振り返ったとき、幼稚園の歴史もまた、その時時の多くの人の努力でつくられてきたことに気付くことができました。

さて、幼稚園をとりまく情勢は大変厳しいものがあります。園児数の減少、幼稚園の幼保園への移行、子育て支援も幼稚園の大きな課題となっています。子どもの育ちに関しても、経験やコミュニケーション能力の不足など、多くの課題が指摘されています。その中で、附属幼稚園がどのような保育、子育て支援を求めていけばいいのか、常に課題として模索してきました。そして、保育においては、やはり原点に立ち戻り、幼児期ならではの教育をしっかりと行うことが、長い目で見た子どもの育ちにも大切であるということに帰着しました。子育て支援の取組も、保育サービスのみには走るのではなく、「親と子が共に育つ」ことを大切に取組を重ねてきました。

本園の実践集録は、現在の形になって4年目となります。担任教諭の保育の実践に加えて、副園長、保育主任、養護教諭と担任以外の教員も実践をまとめているところが、その特徴です。幼稚園の教育は、担任による保育が中心ですが、他の教員が子どもや保護者と関わる機会は小学校・中学校にくらべ格段に多くあります。その意味から、全教員が課題意識をもちながら日々教育活動を行い、こうして実践集録にまとめてきました。

子どものくらしは、家庭から幼稚園、地域社会へと広がり、また、幼稚園以前から幼稚園、小学校以降へとつながっています。幼稚園という場も、小学校・中学校・地域と関わりを広げながら、過去から現在、未来へとつながっています。その広がりにつながりの中で、子どもたち・保護者・教職員は、今を生き、共に育ち合っています。この実践集録が、その育ちの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、ご指導いただきました諸先生方、共に研究を進め、貴重な示唆を与えてくださった共同研究者の西田先生、附属小学校・中学校の先生方に心よりお礼申しあげます。そして、今後とも本園の実践に対しまして、ご指導・ご鞭撻いただきますよう、よろしくお願いいたします。

平成26年3月

副園長 赤木 寛子

## 研究同人

佐々有生 (園長)

赤木寛子 (副園長)

加納美紀 (保育主任)

内田祐 (ほし組担任)

福井智子 (さくら組担任)

南海睦 (つき組担任)

井上結美子 (たんぼぼ組担任)

福島由美子 (養護教諭)

根本美幸 (副担任)

福光裕子 (副担任)

【学部共同研究員】 西田忠男